F/T09 フェスティバル/トーキョー
PRESS RELEASE

Port B ツアー・パフォーマンス

『サンシャイン 63』
構成・演出：高山明

3 月 4 日（水）～8 日（日）/11 日（水）～15 日（日）[全 10 日間]

於：池袋周辺地域

（c） Kohei Matsushima

演劇の枠を超えた、まちあるきパフォーマンス。
第二次世界大戦後、巣鴨プリズン跡地に建てられた
池袋サンシャイン 60 周辺を 5 人一組の観客が巡る。
参加者一人一人がつくる、日本の戦後と「いま」をたどる「時のツアー」。

お問合せ：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4-9-1 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL 03-5961-5202/FAX 03-5961-5207
制作担当：クラウトハイム・ウルリケ u-krautheim@anj.or.jp F/T 広報担当：及位（のぞき）、ハッセル toiawase@anj.or.jp

作品について

『サンシャイン 63』、そして『雲。家。』。Port B による 2 作品再創造・同時再演。

舞台公演にとどまらず、演劇を越境する試みで注目を集める高山明と Port B（ポルト・ビー）。これまでの活動の集大成として、フェスティバル/トーキョーで代表作 2 作品を再創造・同時再演する。互いに呼応し対を成す両作品、その一方が“ツアー・パフォーマンス”『サンシャイン 63』。2008 年 3 月に『サンシャイン 62』として発表された話題作が、一年のときを経てさらに深化し、再び池袋の街に展開される。

サンシャイン 60／戦後史のランドマーク

第二次世界大戦後、巣鴨プリズン跡地に建てられた池袋サンシャイン 60。戦後日本の出発点とも言えるこの歴史的な場所を中心に、戦後の 63 年をたどる「時のツアー」が始まる。ツアーの作り手は 5 人一組となった観客一人一人。約 3 時間半かけてサンシャイン 60 を巡る 16 ヶ所を「旅」し、そして最終訪問地へ…。
建設当時は東洋一の高さを誇ったサンシャイン 60。それが 60 階建ての高層ビルであることは周知の事実でも、A 級戦犯 7 名を含む 60 名が処刑された巣鴨プリズン跡地に建てられたことはあまり知られていない。そのサンシャイン 60 が、ツアーを通じて歴史的オブジェへと異化され、“戦後史のランドマーク”へと変容していく。1946 年から 2009 年まで、63 年間の歴史が、参加者一人一人の記憶と想起によって紡がれるだろう。

参加者は、5 人一組となって池袋の街を散策する。受付で渡された地図を頼りに赴く先は、誰かの住まいだったり、ホテルの一室だったり、巨大書店の一角だったりと色々だが、すべてに共通しているのはどこの窓からもサンシャイン 60 が見えること。参加者はサンシャイン 60 を眺めながら、巣鴨プリズンについてのインタビューや東京裁判に関するドキュメントの朗読を聴いたり、部屋の住人とサンシャインを背景に記念写真を撮ったり、記憶や忘却についてみんなで議論したり。

この公演の“舞台”は都市である。Port B は、舞台装置で都市を創りだすのではなく、実際に存在する都市を「演劇公演」という枠組みの中に「引用」する。日常的に接している都市が、観客の“ツアー”参加によって普段と異なる様相を呈し、非日常的な「もの」に変容していく。「ツアー・パフォーマンス」は、その様子を観客一人一人に体験してもらうことで都市を「インスタレーション」の場に変える新しいタイプの演劇である。

劇評

彼らは、演劇に関して再考を促す。しかも、都市まるごとを演劇作品の舞台装置として用いるという方法で。この大胆さ！実験的な演劇とやらは、とかく理屈が先行しがちで退屈なものが多いなか、彼らは一線を画す。

新川貴詩（美術＆演劇評論家）

週刊 SPA! 2008 年 3 月 11 日号

このツアー・パフォーマンスには、いわゆる演じ手はいない。私たち観客は受動的に観るのではなく、劇場の外に観に出かける。そして舞台を観る代わりに街を読み、新しい発見をする。

扇田昭彦（演劇評論家）

ダンスマガジン 2008 年 6 月号

Port B の作品『サンシャイン 62』は、第二次世界大戦という暗い時代を扱う。公演の中心に立つのは、東京の都市部、池袋にあるビル「サンシャイン 60」である。〔…〕多くの人々を引き寄せるこの複合施設をその暗い前史と結び付ける者は誰もいない。〔…〕Port B 作品の参加者たちは、「サンシャイン 60」の周囲を巡る旅に送り出される。そして旅の中で彼らは、この建造物と何度も何度も向き合うことになるのである。

ウルス・シェトリ（ジャーナリスト）

新チューリッヒ新聞（Neue Zuercher Zeitung）2008 年 7 月 9 日

深く歴史を掘り起こし、互いに絡み合う豊かな内容をそなえた高山明の『サンシャイン 62』は、現代における最も興味深い作品の一つである。高山は日本の歴史の中から、罪を負った過去の破片を飛び散らせる。そしてこの記憶のかけらたちを自分だけの想起へと変容させることが、一人一人の参加者に委ねられるのである。

クラウス・デアムーツ（演劇批評）

南ドイツ新聞（Sueddeutsche Zeitung）2008 年8月 7 日

このプロジェクト全体が、われわれに対して、具体的な空間において歴史を思考させようとそそのかしていると言えるのではないだろうか。つまり、ヴィリリオが書いたように歴史と地理の欠如を経験している電脳世界に住むわれわれが、歴史と地理を奪還しようとするとき、あるいは、そのような試みを演劇という表象の形式の中に改めて引き寄せようとするとき、このプロジェクトで試みられている戦略が極めて有効な表現の形式であるだろうと私には思われるのである。

鴻英良（演劇批評）

「シアターアーツ」第 35 号、2008 年

アーティスト・プロフィール

構成・演出：高山明　Akira Takayama

1969 年生まれ。1994 年より渡欧。演出助手として研鑽を重ね、多数の舞台、オペラ等に携わりながら演出・戯曲執筆を行う。帰国後 2002 年ユニット Port B（ポルト・ビー）を結成。演劇を専門としない表現者たちとの共同作業によって、既存の演劇の枠組を超えた前衛的な作品を次々と発表。創作の拠点「にしすがも創造舎」がある池袋・巣鴨一体では、サンシャイン 60 が象徴する日本戦後史を巡る 3 部作として、舞台作品『雲。家。』、ツアーパフォーマンス『サンシャイン 62』、演劇的インスタレーション『荒地』を発表し、演劇界のみならず現代アートの文脈からも大きな注目を集めた。現実の都市や社会に存在する記憶や風景、メディアなどを引用し再構成しながら作品化する手法は、「来るべきもの」としての現代演劇の可能性を提示する試みとして、国内はもとより海外のフェスティバルや美術展でも大きな注目と期待を集めている。

Port B（ポルト・ビー）　http://portb.net/

2002 年東京にて結成。高山明がドイツで培った演出メソッドを叩き台に、演劇以外の活動に携わるアーティストや職人を中心に演劇的実験を繰り返す。
活動は多岐にわたる。「演劇（的）テクスト」に取り組んだ舞台には、ブレヒトの第一詩集『家庭用説教集』を素材とした『シアター X・ブレヒト演劇祭における 10 月 1 日／2 日の約 1 時間 20 分』（03 年）、H.ミュラー『ホラティ人』（05 年）、E.シュレーフ『ニーチェ』（06 年）、E.イェリネク『雲。家。』（07 年）がある。
他方、高島平をフィールドワークし団地で暮らす人達を舞台に招き入れた『Museum: Zero Hour ～J.L.ボルヘスと都市の記憶～』（04 年）や、隅田川をフィールドワークした成果と謡曲『隅田川』をクロスさせた『Re:Re:Re:place ～隅田川と古隅田川の行方（不明）～』（05 年）はドキュメンタリー性の強い舞台である。
近年は更に、実際の都市をインスタレーション化する“ツアー・パフォーマンス”なるものを企画。「おばあちゃんの原宿」巣鴨地蔵通りを舞台にした『一方通行路』（06 年）、東京観光の代名詞はとバスを使った『東京／オリンピック』（07 年）、池袋サンシャイン 60 の周囲を 5 人一組の参加者が巡った『サンシャイン 62』（08 年）は、各種メディアに取り上げられるなど好評を博した。
また、“演劇的インスタレーション”と称される作品の系譜に、旧豊島区立中央図書館における『荒地』（08 年）、旧ソウル駅駅舎を使った『東西南北』（08 年）、茨城県取手市井野団地での『団地大図鑑』（08 年）があり、これらは現代美術の領域においても注目を集めた。
いずれの活動においても「演劇とは何か」という問いが根底にあり、「きたるべきもの」としての現代演劇を追求している。

高山明 および PortB 作品上演歴

2003 年 10 月 「シアターＸ ブレヒト的ブレヒト演劇祭における 10 月 1 日／2 日の約 1 時間 20 分」構成・演出（シアターＸ）
2004 年 5 月 「ベルリン演劇祭・若手演劇人の為の国際フォーラム」参加
2004 年 9 月 『Museum: Zero Hour ～J.L.ボルヘスと都市の記憶～』構成・演出（シアターＸ）
2004 年 12 月 インスタレーション『inter-view』制作（ギャラリー・アップリンク）
2005 年 3 月 H.ミュラー作『ホラティ人』構成・演出（シアターＸ）
2005 年 5 月 ベルリン「Intransit 演劇祭」より招聘、パフォーマンス作品の構成・演出（世界文化の家）
2005 年 12 月 『Re:Re:Re: place ～隅田川と古隅田川の行方（不明）～』構成・演出（アサヒ・アートスクア）
2006 年 3 月 E.シュレーフ作『ニーチェ』演出（BankArt NYK ホール）
2006 年 11 月 ツアー・パフォーマンス『一方通行路 ～サルタヒコへの旅～』構成・演出（巣鴨地蔵通商店街）
2007 年 3 月 東京国際芸術祭にて E.イェリネク作『雲。家。』演出（にしすがも創造舎特設会場）
2007 年 11 月 はとバス・ツアー・パフォーマンス『東京／オリンピック』構成・演出（東京全域）
2007 年 3 月 東京国際芸術祭にて『東京／オリンピック』再演
2008 年 3 月 ツアー・パフォーマンス『サンシャイン６２』構成・演出（池袋周辺地域）
2008 年 6 月 演劇的インスタレーション『荒地』構成・演出（旧豊島区立中央図書館）
2008 年 10 月 ソウルの現代美術展「プラットフォーム」にてインスタレーション『東西南北』制作（旧ソウル駅）
2008 年 10 月 「取手アートプロジェクト」にてインスタレーション『団地大図鑑』制作（取手井野団地）

特別寄稿

演劇であり美術でもあるPort Bの作品世界

新川貴詩 （美術＆演劇評論家）

Port B(ポルト・ビー)の作品は演劇なのか、それとも美術なのか？

この問いは不毛であり、彼らの活動をカテゴリーで分け隔てることにあまり意義は見出せない。というのも、演劇であり美術でもあるのがPort Bの表現だからである。2002年に演出家の高山明を中心に結成された彼らは、次のように自らを紹介している。

『「演劇とは何か」という問いが根底にあり、「きたるべきもの」としての現代演劇を追求している』(註)。

この一文には、演劇と呼ばれる表現形式をあらためて検証し、演劇の再定義を図ろうとする彼らの果敢な姿勢がはっきりと現れている。その一方で、彼らの表現は美術の流れの中でも確実に位置づけられる。とりわけ、彼らがここ数年取り組んでいる「ツアー・パフォーマンス」と称する一連の作品はこのことが顕著だ。

ツアー・パフォーマンスとは、都市まるごとをインスタレーション化し、Port Bが企てたルートに従って観客が街を歩き回る試みである。2006年に巣鴨地蔵通りで発表した『一方通行路～サルタヒコへの旅～』を皮切りに、翌年には実際のはとバスを利用し主に1964年の東京五輪ゆかりの建物を巡る『東京／オリンピック』、そして08年3月には『サンシャイン62』を実施した。その発展的再演にあたるのが、今回のフェスティバル/トーキョーにおける『サンシャイン63』である。そこで本稿では、前作『サンシャイン62』を軸に、美術シーンの潮流を踏まえつつPort Bについて語りたい。

Port Bによる『サンシャイン62』は、5人1組となった観客が地図を頼りに池袋一帯を巡るツアー・パフォーマンスである。廃校やホテルの一室、老朽化したアパート、巨大書店、小さな喫茶店など、その場からサンシャイン60が眺められる十数カ所の場所を約3時間かけて歩き回り、そして先に進むにつれて、かの超高層ビルが多様な意味を孕んでいることに喚起されるといった内容である。

こうした試みは、美術でいうサイトスペシフィック・アートに通じる。サイトスペシフィック・アートとは、場所の特性を重んじ、周囲の景観や地域の歴史、風土なども積極的に採り入れた作品のことである。このような作品傾向は50年代頃から現れたが、日本では90年代以降に加速的に展開され、廃工場や空きビル、競馬場、営業中の商店などありとあらゆる場所で、その場に応じた作品が設置される機会が繰り広げられてきた。

そしてPort Bの『サンシャイン62』は、戦後日本の暗部と驚異的な経済成長を象徴するサンシャイン60という建物のみに焦点があてられているわけではない。訪問先のひとつひとつが丁寧に選ばれ、さらにはその場にふさわしい仕掛けが巧みに設定されている。つまり、十数カ所におけるサイトスペシフィック・アートの集積によって、『サンシャイン62』という大きなサイトスペシフィック・アートとして構成されているのである。このように複合体的な性格を持つ本作は、さまざまな顔つきを備える池袋の街とまさに呼応する。したがって、場所の特色を的確に読み取った上で作品と街とを一体化させた本作は、紛れもなくサイトスペシフィック・アートであると考えられる。

また、最近では美術と街を結びつけ、街の随所に設置した作品を巡るクルージング型の展覧会が相次ぐ。08年の秋に限っただけでも、「金沢アートプラットホーム2008」や「カフェ・イン・水戸2008」、横浜の「黄金町バザール」、「Akasaka Art Flower 08」など街ぐるみの展覧会が各地で目白押しだった。なお、やはり08年の秋に開催

された展覧会「取手アートプロジェクト2008」では、彼らは多くの美術家たちに混じってインスタレーション作品を発表したほどだ。そしてPort Bのツアー・パフォーマンスは、こうした趣向の展覧会と共通点がある。それは、この種のクルージング型展覧会が地図を片手に観客が街を巡る設定であることだけに限らない。先ほど述べたとおり、複数の訪問先の集積がひとつの作品として成り立つという点において、彼らの作品は展覧会的な性格を備えていることも指摘しておきたい。

さらに『サンシャイン62』は、観客参加型アートの観点からも語ることができる。従来の美術作品はアーティストの手によってつくられ、観客はそれを鑑賞するという一方向的な関係にすぎなかった。だが、やはり90年代以降、アーティストと観客が共同で作品制作に携わるといった双方向的なスタイルが増えていった。本作も同様に、観客は積極的に作品に関わり、主体的な行動も求められる。というのも、本作のツアーの間、5人1組の観客にはそれぞれの役割が与えられ、各自が作業を担うことによって初めて本作は成り立つ仕組みとなっているからだ。

よって本作は、観客はただの鑑賞者ではなく、個々がつくり手の一人である。そのうえ、観客は出演者とも化す。筆者が池袋を巡ったときのこと――。明るい時間帯に5人の男女でラブホテルから出た矢先に、通りすがりの青年に好奇心に満ちた眼差しで目を向けられてしまった。さしづめわれわれは、特殊な性嗜好の持ち主集団だと思われたに違いない。青年の呆然とした表情は、いまも忘れられない。つまり、本作では観客さえも見られる立場となる。Port Bは、つくり手と受け手の垣根を軽々と越えると同時に、見る／見られるといった関係に揺さぶりをかけるのだ。

このように昨今の美術動向に基づいても、Port Bの作品は十分に語りうる。実際、彼らの活動は演劇界のみならず美術界からも注目され、先述した展覧会の他にも、出品依頼が相次ぐ。これは美術の観点からとらえても、彼らの表現が他の美術家たちに比べ群を抜いているからだろう。

演劇と美術が交差する点に位置する表現――それがPort Bの作品世界なのである。

(註)Port B 公式サイトより引用

新川貴詩 （美術＆演劇評論家）

1967 年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業、同大学院修士課程(情報通信専攻)修了。美術ジャーナリストとして新聞や雑誌に現代アートを中心に文章を執筆するほか、展覧会企画や学校教員、ワークショップ講師などを務める。編著書に『明和電機会社案内』、『小沢剛世界の歩き方』ほかがある。

キャスト/スタッフ

構成・演出	高山明
地図作製	蓮沼昌宏
音源製作	宇賀神雅裕、高山明
技術	井上達夫、宇賀神雅裕、郷田真理子
ツアー・サポート	井上達夫、猪股剛、宇賀神雅裕、郷田真理子、 萩原ヴァレントヴィッツ健、蓮沼昌宏、林立騎
制作・ドラマトゥルク	林立騎
製作（初演）	Port B
主催	フェスティバル/トーキョー

公演/チケット情報

場所	池袋周辺地域
日程	3 月 4 日[水]〜8 日[日]、11 日[水]〜15 日[日]　全 10 日間
出発時刻	11:00〜15:00
	・　5 人一組のグループで 20 分おきに出発[各日 13 組／65 名]。
	・　各組全 3 時間半ほどのツアー・パフォーマンス。
チケット料金	一般　4,000 円、学生　3,000 円　（要学生証提示）
お取扱い	フェスティバル／トーキョー（HP のみ）、ぷれいす（電話のみ）

F/Tパフォーマンス　チケット 2008 年 12 月 18 日（木）前売開始　※F/T 参加作品は対象外

■チケット取扱

フェスティバル/トーキョー（HP のみ）　http://festival-tokyo.jp

ぷれいす（電話のみ）　03-5468-8113（平日　11:00-18:00）

電子チケットぴあ 0570-02-9999（Pコード予約）http://pia.jp/t　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

イープラス http://eplus.jp　※『サンシャイン 63』と『演劇/大学 09 春』は対象外

・指定席の場合、開演時間に遅れたお客様はご指定のお席にお座りになれない場合がございます。
・未就学児童のご入場はお断りさせていただきます。
・受付開始及び当日券の販売は開演 1 時間前、開場は 30 分前からとなります。
・チケットの払戻、観劇日の変更はできません。
・チケット料金には消費税が含まれます。

F/Tパフォーマンスを、選んで観る。全部観る。誘って観る。学生も観る。
フェスティバル/トーキョーならではのお得なチケットでお楽しみください。　※フェスティバル/トーキョー・ぷれいすのみ取扱い

◇F/T 回数券　*選んで観る！*　※お好きな演目を選んでご覧いただけます。（『サンシャイン 63』は対象外）
3 演目　¥10,000　（¥3,333/枚）、5 演目　¥15,000　（¥3,000/枚）

◇F/T パス（13 演目）*全部観る！*　※全ての演目をご覧になれます。（『サンシャイン 63』は対象外）
¥30,000（¥2,300/枚）

※F/T 回数券、F/T パス（13 演目）のお取扱いについて
・2 月 13 日（金）18:00 まで販売（限定枚数）
・観劇演目・日時が未定でも購入できます。
・購入後は演目・日時のご予約を受付けます。
・予約なしでも当日ご入場出来ます。但し、満席時はご入場頂けない場合がございます。
・確実にご覧頂くためには演目・日時予約をお勧めいたします。
・回数券・パスはご本人様のみ有効です。

◇ペアチケット　*誘って観る！*
チケット 2 枚分の料金から 10%OFF でご購入頂けます。（例／¥4,500×2 枚＝¥9,000→¥8,100）
※2 名同日時観劇のみお受けいたします。 ※当日券のご用意はございません。 ※『演劇/大学 09 春』は対象外です。

◇学生料金　*学生も観る!*
学生　全演目 ¥3,000（要学生証提示）　高校生以下　全演目¥1,000
※東京芸術劇場中ホール公演は S 席　※当日でもご購入できます。

◇Port B セット券（『雲。家。』『サンシャイン 63』）　¥6,400　（¥3,200/枚）
※ぷれいすのみ取扱　※2 月 13 日（金）18:00 まで販売（限定枚数）

3 演目	¥10,000（¥ 3,333/枚）	F/T パス	¥30,000（¥ 2,300/枚）
5 演目	¥15,000（¥ 3,000/枚）	ペアチケット	10%　OFF

フェスティバル/トーキョー09 春　開催概要

名称　フェスティバル/トーキョー09 春
Festival/Tokyo 09 spring

会期・会場　2009 年 2 月 26 日（木）～3 月 29 日（日）
東京芸術劇場　中ホール　小ホール 1・2
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）
にしすがも創造舎

プログラム　F/T パフォーマンス　14 演目
F/T 参加作品　5 演目
F/T プロジェクト（シンポジウム/ステーション/クルー）

主催　東京都
財団法人東京都歴史文化財団
フェスティバル/トーキョー実行委員会
豊島区、財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

共催　社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター

事業共催　国際交流基金

協賛　アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

助成　財団法人アサヒビール芸術文化財団

後援　外務省、社団法人日本芸能実演家団体協議会、社団法人日本劇団協議会

協力　東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、社団法人豊島法人会

宣伝協力　株式会社ポスターハリス・カンパニー

平成 20 年度文化庁国際芸術交流支援事業

提携事業　東京芸術見本市 2009

写真/クレジット一覧

『サンシャイン 63』写真 1

(c) Kohei Matsushima

(c) Kohei Matsushima

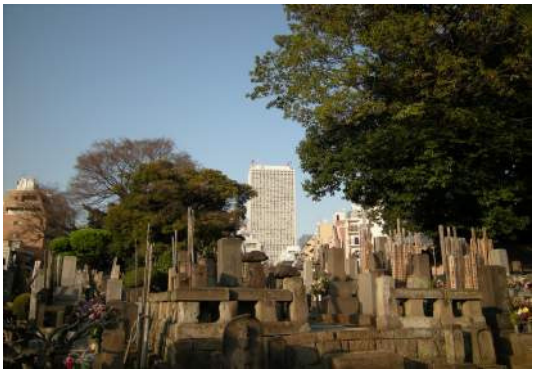
(c) Kohei Matsushima

(c) Kohei Matsushima

「写真家のクレジット」を必ず併記してください。

『サンシャイン 63』写真 2

(c)不要



(c)不要

ポートレート　高山明

(c)不要